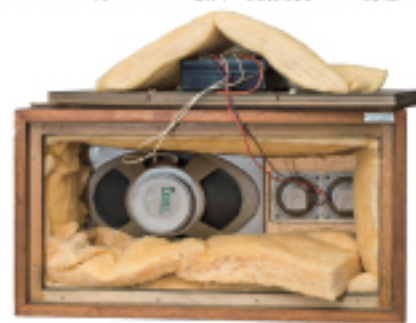




Model-319、Model-DSL 529 のフロントグリル。どちらのモデルも細い金属製のプレートを組み込んだ特注のグリルが採用されており、前面を殆ど金属に覆われていて透過率は40%もないように見えるが、これはユニットの前面に負荷が掛かるアコースティックレンズの役目の機能を果たした構造になっている

Model 319

DSL-529でも使われていたフルレンジユニット92390のセンター・トゥイーターの99110Bが2本のバーで1基取り付けられた同軸2ウェイユニットで、専用のL / Cネットワークがフレームに装着されている。このユニット1基が搭載されたキャビネットは若干小振りながらModel-529同様に密閉型のアコースティック・エア・サスペンション方式が採用されている。1960年代のEMIのレコードは、Model-319、DSL-529と共にこのスピーカーを通して音決めされており、またレコーディング現場でも評価が高く、英BBCや米キャピタルレコードでもモニターとして使用されていた。



Model-DSL 529の内部写真。92390-AL 1本とその横にトゥイーターが2基装備され、大きな黒い箱のネットワーク X / O 4500 につながっている

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBLなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎月テーマとなるブランドを取り上げていこう。今号は1960年代に発売されたEMIのスピーカーをご紹介します。

本文 / 田中伊佐資
製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

■ 26回 EMI

EMIは1931年にイギリスのレコード会社である英コロムビアと英グラモフォン (HMV) が合併し、Electric and Musical Industries Ltdとして設立された。同社は傘下に多数のレーベルを抱える総合会社として存在しており、同名の「EMI」というレーベルが設立されたのは1972年のことで1973年にEMIは東芝音楽工業株式会社(東芝の独立レーベル)に資本参加し、東芝EMIと改称。1960年代にはEMIのレコーディングディレクターであるウォルター・レグが当時のスピーカーの音に満足できず自社開発を提案、スピーカー等のオーディオ機器も自社開発していた。



Model-DSL 529

1960年代にEMIが独自に開発した複合楕円コーン型フルレンジユニット1基+トゥイーター2基を搭載。密閉型を採用し、ARでおなじみのアコースティック・エア・サスペンション方式のキャビネットに収納されている。インピーダンスは40の小型モニターで、フルレンジユニットはあのDECCAデカに搭載されている92390とはほぼ同型の320x165mm楕円ユニットで、センターがアルミ振動板のメカニカル型構造になっている。トゥイーターは99110Bで7cmの紙コーン製。2個は若干再生帯域を分けて使われており、クロスオーバーユニットはX.O.4500 / 4型が搭載されている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

EMI



92390-CL 同軸ユニットの正面写真。Model-319 に搭載されているユニットで、フルレンジユニットのエッジ部分はゴム製の素材となっている。これはModel-DSL 529 のユニットも同じである



Model-319 内部の写真。同軸タイプのユニット92390-CLのフレームに L / C 型ネットワークが装着されている



99110Bトゥイーターの正面写真直径5cmほどの紙製の振動板となっている手頃でいい感じの大きさが魅力物音が振き立てられるスピーカー



99110Bトゥイーターの正面写真直径5cmほどの紙製の振動板となっている手頃でいい感じの大きさが魅力物音が振き立てられるスピーカー

このところ物欲の虫がざわざわと騒ぎ出してきて、どうもいけない。ほくはオーディオについては1セット集中主義で、サブシステムとか寝室システムとかを持たないタイプなのだが、長いことこの連載を続けてきたこともあり、ヴィンテージで一貫した機器が欲しくなってきた。フランは何もないのだが、ともかく置く場所がないから、スピーカーもアンプも一切合切が小型であることが望ましい。

そこへ来て、今回はEMIのモニタースピーカー、しかも手頃でいい感じの大きさ(価格も射撃圏内だ)。のっけから興味津々だった。

今回は2種あり、まず出てきた319というモデルは、楕円トゥイーターとそのフロントにトゥイーターを付けた同軸ユニットを採用している。因は違えど、楕円はドイツのイソフォンやRFTで聞いた記憶があり、イメージはかなりいい。岡田さんは、さて今日はなにをかけるか悩んでいる。いろいろな曲をちょこちょこ試し聴きしている。もうその段階でだいたいの様子がわかってきた。

ビル・エヴァンスの定番「ワルツ・フォー・テビィ」でスタート。しとやかで英国スピーカーに共通の味わい深い洗みがある。これは貴族の音。原音忠実再生ではないが、心の隅隅にすっとさりげなく入ってくる。何度も聴いてよく知っている「デビィ」だが、またひとつ新しい

風合いを感じた。

EMIとなればクラシック。ではなくてはくはビートルズ。勝負どころとしてあるジョン・レノンの声を聴かないと始まらない。曲は「ノルウェーの森」。声にうるおい感があつて色っぽい。ビートルズ・オーディオを極めようとしたらちよつと驚きがある英国製スピーカーになるんだろいうなあって思った。

ジュリー・ロンドンのハスキー・ヴォイスもまた愛があつていい。同軸でしかもトゥイーターがウーファーと同じ紙素材なので、すごくまとまりがいい。

ここで少し大きな529が登場。これは同軸ではなく楕円のトゥイーターにウーファーという構成。比べる意味もあつてそのままジュリーをかけてもらうと、中高域の分解能がよくなり、すつきりと整理して聴かせる。319が持っていた演出が減退してハイファイ調になった。スタジオで使うモニターとしてグレードはアップした。しかしヴィンテージ・オーディオの価値判断は単純ではなく、319の付帯音があるような、含みがあるような音にもどこか惹かれる。

最後はスコットランド室内管弦楽団のモーツァルトで比べてみる。弦の響きは間違いなく529が抜群にいい。この大きさでこんなに格指な音がするもんなかなと思った。岡田八目というように、ロックやジャズが好きなのは言うのだから間違いないと思います。



711-A のアッテネーター。このモデルのみプッシュスイッチ式のタイプが採用されている。FLAT RESPONDS とMIDは -4dB、TWEET ERは +4 / -4 dBの2段階のセレクトが可能になっている。



Model-711A の内部。3タイプ4基のユニットが搭載されており、トゥイーターは同じタイプを2基搭載。このモデルだけに開発された楕円形ミッドレンジユニットが採用されており、大きさはウーファーと比較してかなり大きめで、システムとして中低音の特性が格段と良くなっている。



フロントデザインにはおなじみの金属製のメッシュフロントカバーが採用されている。サイズは Model-529 よりひと回り大きくより縦長で、奥行きが少し深い密閉キャビネットが採用されている。サイズは高さが 73cmで 幅 36cm、奥38cmとなる

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ヴィンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号から次号にかけては英国EMIの1960年代に登場したスピーカーを紹介していこう。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

第50回 EMI

EMI社は1930年代の初め頃にその当時のイギリス最大のレコード会社である英国コロムビアと英国グラモフォンが合資して設立された会社で正式名は Electric and Music industries Ltd. 両社は1900年代の初め頃から蓄音器などの製造、販売を手がけており、音響機器の開発にも積極的だった。同社で開発したスピーカーは小型のモニター機から46cm口径のユニットを搭載した大型フロア型、アンプを搭載したモデルなど20機種以上もある。

Model-711A

1960年代に入ってから製品で、以前も紹介したModel-529、319とほぼ同時期に開発されたもの。大小数種類あるラインアップの中で最高グレードのモデルとなる。この頃のイギリスではBBCが少し先に録音スタジオ用のラージモニター機LS 5/1を開発しており、これに対抗した形で開発されたのがこのModel-711Aとなる。



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

EMI / Model-711A

ウーファーのサイズは Model-529、319と同様でエッジはゴム製。センター付近がアルミで、外側には紙の楕円形振動板を採用。ボイスコイルは大きなタイプに変更され、マグネットも2倍ほど大きなサイズが搭載されているため、パワーハンドリングのグレードが上がっている。



トゥイーターは紙製の3インチサイズの振動板が採用されたEMIの定番ユニット。Decca DecolaやModel-529にも同様のタイプが搭載されている。

ミッドレンジはこのモデル専用開発された楕円形の密閉タイプのユニットで、こちらもセンター部分がアルミで外側には紙製のフィクスエッジの振動板が採用されている。このユニットを搭載することにより、オールジャンルの音楽ソースに対応できる完成度の高いシステムとなっている。

ああ英国製だなと思える 翳りを帯びた重みある音

ジョン・レノンが凶弾に倒れた1980年12月8日、そのとき僕は高三2学期の期末テスト中で、衝撃のあまり勉強のやる気を一挙に失ったことを憶えている。それにかこつけてやらなかったともいえるが、ショックだったことは確かだ。

偶然にも42回目当たる命日、アトリエJe-teeへ行くことになった。さらに偶然にもその日のテーマが英国EMI社のスピーカーだった。となるとビートルズが作品を録音したEMIレコーディング・スタジオ(76年にアビー・ロード・スタジオと改名)を意識しないわけにはいかない。

その日聴いたのはEMI 711Aという3ウェイのフロア型スピーカーだった。スタジオでこれがモニターとして使われていたわけではないだろうが、必然的にビートルズへの思い入れたっぷりに試聴が始まる。

1曲目は「デイ・トリッパー」。イントロのギターがガーンと前に出てきた。ヴォーカルもさらっと滑らかというより、がっちり厚みがある。ああ英国製だなと思える翳りを帯びた重みがある。

スピーカーの振動板が紙製の楕円形でその大きさを物語るようにミッドレンジが充実している。トゥイーターがダブルで入っているが、これは中低域との兼ね合いでそういう設計になったのだろう。岡田さんは「このスピーカーが入っているEMIのスピーカーはこのモデル

だけなんですよ」と教えてくれた。ジョン・レノンの声を堪能するのならばなんとと言っても「ノルウェーの森」だ。いく度聴いても、切ない哀愁が胸に刺さってくる。

711Aは、曲の寂寥感をうまく表現していて、妙に枯れた感じではなく帯域的にはピラミッド型の安定感があった。哀しい感じがうまく出ているのと同時に、力強さもあったということだ。いかにもフロア型らしい余裕がある音だ。

部屋の置き場所に困ってしまうほどの目立った大きさではないし、アンティークな家具調の雰囲気もあるから、敢えて人が集まるリビングルームに置いてみたいと思わせた。

続いてやはりジョンが歌う「イン・マイ・ライフ」も「ノルウェーの森」と同じ感想だが、間奏部分でチェンバロを思わせるピアノソロを聴いて、もしかしてクラシックもかなりイケるのではと想像させた。すぐにバッハのチェロ独奏がかかって、やっぱりその通りだった。

スピーカーが持っている重厚なサウンドが、チェロのスケール感を見事に演出していて、超大型スピーカーが鳴っているかのように雄大だった。考えてみれば、EMI社がスピーカーの開発をするあたり、自社レベルが制作したクラシックで音決めをしただろうから、これほどドンピシャでマッチしているのは当然といえはなのだ。